

外来および病棟でのFreeflow®

運用による尿流量検査の効率性向上

Freeflow®使用により、院内での尿流量検査の効率性向上によるメリットについて千葉県立佐原病院の加賀先生にお話を伺いました。

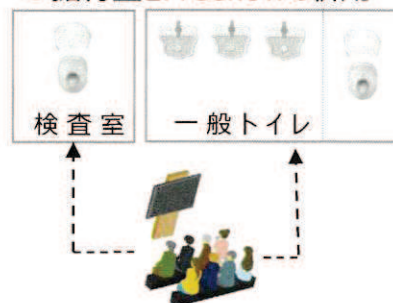
据付型測定器とFreeflowの外来での併用によるメリット

前職である獨協医科大学病院排泄機能センターでは、下部尿路機能障害の患者が北関東中から集まってきており、とても外来患者数が多かったです。外来には据付型の尿流量測定器が1台のみでしたので、患者さんの検査が重なると待ち時間が発生します。そうなりますと順番を待ちきれず排尿をしてしまう患者さんもあり、次にトイレに行きたくなるまで数時間待ってもらうケースもありました。そういった患者さんの待ち時間の課題を解決する為に、一般のトイレでも尿流量測定が可能なFreeflowを導入し、据付型測定器とFreeflowの2台で運用することで患者さんの待ち時間の削減に役立ちました。

● 据付型測定器のみでの運用



● 据付型とFreeflowの併用



病棟での使用により、看護師の労務負担軽減を実現

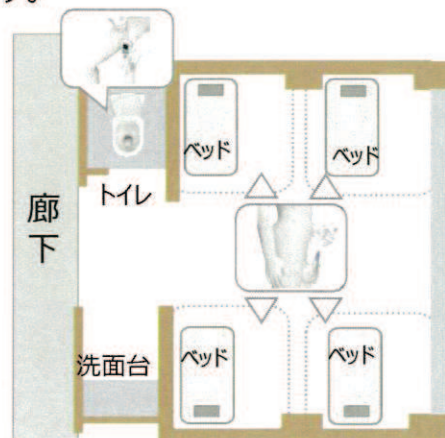
当院には2Fに外来、3、4Fに病棟があります。Freeflow導入以前は入院の患者さんが尿流量測定をする際、病棟の看護師が付き添って外来まで移動する必要がありました。所要時間としてトータルで20分～30分くらいかかりますし、ADLの低い患者さんですと車椅子やストレッチャー等で運ぶ必要もありますので、看護師の労務負担が大きいという課題がありました。

Freeflowであれば病棟にあるトイレあるいはベッドサイドで測定を行うことができますので、上記の課題を解決することができました。また、他科からの検査依頼を受けた際も同様に、外来に検査に行く時間と労力を削減でき看護師の労務負担の軽減になりますので、これらの運用は働き方改革の一助となったのではないかと思います。

患者さんの検査ストレスの軽減が期待

当院では、尿道カテーテル抜去テストの際に、必要に応じて患者さんに蓄尿を数時間してもらうことがあります。その後、患者さんが尿意切迫感を知覚したら排尿してもらうのですが、この際に病棟で検査を行うことにより、患者さんが外来に行く労力や検査待機時間、排尿を我慢する時間も省略することができますので、患者さんの検査ストレスを軽減させてあげることが可能です。

また、据付型の尿流量測定器ですと、緊張して排尿するまでに時間がかかる（ためらい時間）場合や「検査を待たせてしまうかもしれない」等の心理的圧迫により、生理的な排尿が行えないことがあります。Freeflowであれば一般のトイレを使用して検査を行うことができるので、ためらい時間を気にせず、安心して排尿を行うことができます。



*外来に行かず、病棟内で検査の完結が可能

簡便な本体収納および測定データ管理

機器（Freeflow本体）が非常にコンパクトですので当院ではナースステーションの棚に保管しており、看護師の動線を妨げることなく管理ができます。患者データはモバイルプリンターで印刷し、印刷結果をスキャンして電子カルテに反映させて管理しています。



*ナースステーションでのFreeflow収納(イメージ図)

「時間と場所を選ばない」Freeflowの有用性

入院中の患者はADL低下などに伴って低活動膀胱をきたすことがあり、その評価の一つに尿流量測定が必要です。ただ、排尿を指示してもいつ排尿してくれるかわかりませんので、従来は夜間などの当直時に排尿されたい場合、泌尿器科外来も開いていない為、タイミングが合わなければ検査ができませんでした。Freeflowの病棟での運用により、夜間であっても患者が尿意を訴え排尿をする際にはすぐに測定が可能になり、翌日にはその結果を見て診断や治療の検討ができます。

こういった視点からも、今後更に入院患者への運用が広がっていくのではないかと期待しております。